

目的 宗教衣は他の服飾と異なり、その用祖の信念・教義等を重視するため、厂史的にも生態的にも変化の遅い服飾であるが、佛教が他の國々に傳播する向には同一宗教でも、國家、民族、社会構成に応じた変遷があった。日・韓・中國の法衣を調査することにより、服飾の國家的・厂史的変遷を考察する。

方法 日・韓・中國の法衣を集めて実測し、縫製構成を調査し、又絵画文献を参考とした。

結果 袈裟は最も表面に着装し、宗團の標識である所から、三國共に五条衣・七条衣・九条衣を伝承している。袈裟の硬型・着装方法が二千年の長い間継続されていることは宗教衣であり宗教集團と云う特殊性であろう。しかし附属品は各國で変化し独自性を持たせている。袈裟の下に着用する「ころも」は僧職者を示すもので中國の「深衣」型が各國の民族服と混交し、独自の法衣を作り上げたと考えられる。「衿」は広中衿から発して日本では僧細衿を作り狭衿を作るが韓國は広衿のみであり、中國は左右不對襟衿で更に刺し縫をほとこす。「袖」は三國共に「禪衣」と呼ぶ広長袖であるが型態面で差違がある。又下衣は(又は中衣)三國共に民族服を着用している。  
隣接國家間における宗教衣の変化の最大の原因は、氣候風土と社会徳徳ではないかと推察する。